

S F 的読み解き

子どもという風景

## 第四十回

### 気の広がり

堀内 守

元気あり

「元気よく」とか「元気がない」などという。「元気」は日常よく使われることばである。のみならず「元気があ  
るのはよいことである」という肯定的な文脈で使われて  
いる。

語る人も、聴く人も、「元気」がどんな状態をさして  
いるか、わかり切っている。

「元気な子」。まるでどのような子であるか、直観的にわ  
かるような気がする。

ではどういう状態が「元気」なのか。いざ説明する段  
になると、ほとほと困り果ててしまう。わかつてはい  
る。が、説明できないのである。いろいろ試みても、う  
まくいかない。ええ、面倒だ。大体、わかっていること  
を説明できないなんて、言葉の限界なんだ。そういつ  
て、言葉にゲタをあずけてみたり、自分の語彙の不足に  
苛立ったりする人もあろう。中には、そんなことやめ  
た、と中途で放り出してしまいう人もいる。いてもおかし  
くない。

でも、おかしい。一日に何回となく使っているのに「元氣」を説明できないとは。少し元氣を出して、「元氣」を調べてみることにする。

辞書を引いてみると、いくつかの用法が載っている。用法にも順序があつて、第一に紹介されているのは原意の方である。それによると、「①天地間に広がり、万物生成の根本となる精氣」とある。日常の用法とはかなりへだたっているが、神話的・宇宙論的でスケールが大きい。「②活動の根本となる氣力」となると、日常の用法に近づいてくる。でも、まだまだピンとこない。「③健康で勢いのよいこと」が最後に出ている。思うに、これがフツーに用いられているものだろう。わかりやすい。と、肯定してみたあと、何だかさみしいのに氣づく。だって、日常使われている「元氣」は、こんなレベルのものではなく、もっと光や色や艶があり、びちびちしているのに、この説明ではそれらがあっさりと消されているからだ。何か氣になる。

見直せば、②や①の説明もしかるべき理由をもってい

るように思えてくる。

### 氣の古層

古代ギリシヤのアナクシメネスは、この疑問に答えるような一節を残している。それによると、「われわれの魂が空氣であつて、われわれを統括しているように、氣息（プノイマ）、すなわち空氣が世界全体を包擁している」（山本光雄訳編『初期ギリシヤ哲学者断片集』、一九五八年、岩波書店、十一ページ）である由。わかった？ 氣息と空氣と魂とは同じもので、万物の元素であり、生成の原理であるというのである。

「断片」だから、いろいろに理解される余地がある。が、この中に流れているのは空氣一元論である。そして、空氣が薄くなると火になり、収縮すると靈になり、さらに凝縮すると水になり、もっと収縮すると石になる、というように空氣だけで何でも説明してしまう。

今日から見ると、だいたいかがわしいように見える。

「元氣」の底にはこのような考え方が沈んでいて、時ど

き思いがけない形をとって現われることもある。たとえばインドの思想の古典ともいふべき『ウパニシャッド』(「対応」というような意味である)には、ミクロコスモス(小宇宙)としての人間とマクロコスモス(大宇宙)としての世界とが等置され、解説の道が説かれている。その中で「我」は「アートマン」と呼ばれている。その原意は「呼吸する」である。「呼吸」が「生氣」を意味し、また「自分」をも意味するわけだ。ついでながら、ドイツ語では「呼吸する」ことを「アートメン」というから、以上の話を古い話と見なすだけではもったいない。これらは、呼吸を中心に、精神と身体とを結びつけて考えていたことを示すものである。呼吸運動がヨーガとどのような関係にあるか少し参照しただけでも理解されよう。

子どもがよく眠っている。「すやすや」と表現する。その「すやすや」は、呼吸より来ている。

中国思想によると、「氣」は自然現象の「はたらき」である。「氣」は呼吸によって体内に入り、外にある

「氣」と体内の「氣」が感応する。日本語の「すやすや」も、このような感応を背後にもっているらしい。そうでなければ、「すやすや」という表現から来る安らぎは説明しにくいだろう。子守歌のうち、子どもを眠りにさそう種類のものにはこういう安堵をテーマとした感応を表現したものが多い。

#### 氣になる「氣」

古層のことは通常は忘れている。日常場面では「氣」はもっと気楽にたくさん使われている。「元氣を出して」とか「元氣よく」よりも、そのグループは多様である。しかも文脈はさらに多様だから、一筋縄ではとらえきれない。

氣丈、氣化、氣分、氣圧、氣付、氣合、氣宇、氣色、  
氣炎、氣性、氣泡、氣味、氣前、氣品、氣風、氣骨、氣  
息、氣配、氣脈、氣転、氣運、氣象、氣絶、氣量、氣  
慨、氣勢、氣樂、氣管、氣鋭、氣質、氣魄、などなど。

また、氣を下にもつ名詞として――

人気、才気、士気、心気、天気、正気、血気、志気、

夜気、殺気、活気、勇気、根気、病気、堅気、勝気、覇気、などなど。

動詞になると、「気」のあり方はもっと多様になってくる。それを大別して八つに分けてみるができる。

- ① 全般的に精神のあり方を示す。「気を静める」「気がめいる」。
- ② 折や事にふれてはたらく心の端々。「気がきく」「気が散る」。
- ③ 持続する精神の傾向性。「気のいい」「気が長い」。
- ④ 起動因。「気がない」「気が進まない」。
- ⑤ 関心。「気が進む」「気を引く」。
- ⑥ 持続力。「気が尽きる」。
- ⑦ あれこれ考える。「気をもむ」「気にやむ」。
- ⑧ 感情のあり方。「気まずい」「気を悪くする」。

以上をさらに「元・気」の側に近づけてみると、「気」の相は、日常場面の裏側に深々と広がっているように見えてくる。何と「気」はたえずくるくると姿を変えているのである。変えているのがその恒常的なあり方である。

## 生存の根本

古い時代から「気」は生存の根本であると考えられてきた。さまざまな隠喩にそれが出ている。今日から見ると荒唐無稽のように思われる説明でも、あっざりと捨て去るには惜しいようなふくらみもっている。たとえば「気がつく」を例にとるなら、そこには幾重ものレベルの意味が読み込まれているのがわかる。

一方には具体的な何か、という個別的なものに「気がつく」という言い方がある。お金<sup>おカネ</sup>が落ちていのに「気がつく」などがその典型的な例である。ところが、他の極には、それまで気を失っていたのがようやく「気がつく」というようなレベルのものがある。まわりの人びとの安堵の吐息がきこえてくるようにも感じられる。息を吹き返すという表現がこれと感応していると見てよいであろう。小児の場合、突然引きつけを起こし、全身を痙攣<sup>けいれん</sup>させることがままある。まわりの人びとは「気が気でない」状況で、「気遣い」、「気もそぞろ」でいる。そこへ、「気がついた」という一報が入る。雰囲気は一気

に変わって、あたりの気配もゆるんでくるだろう。

安心した人のなかには、それまでの気分が突然に変わったものだから、気が遠くなるように感ずる人も出てこよう。

### 善悪の彼方

そのレベルの近くには、よいとか、悪いとかの評価的な判断にはなじまないものがある。

「気のいい奴」「悪気がない」等々のような場合の「気」だ。

「気のいい奴」という表現は「憎めない奴」と等価である。まねしようと思っても、できない。さりとて、まねしようとも思わない。無視することもできないし、尊敬することもできないが、「気になる」存在で、その前に立つと「憎めない」。

無邪気なのだ。イノセントなのだ。

だから「気のいい奴」の「いい」は、「善」でも、「良」でもない。そういう二項対立には当てはまらない。要するに「参ったなあ」とカブトをぬがされてしま

うような相手である。

大いなる愚者かもしれない。大いなる知患者かもしれない。

このような「気のいい奴」は、寓話のなかに描かれているのがふつうである。俗なる社会にしながら、聖性をもっている。いばらない。その大愚がこの世の小賢しさを照し出す鏡になったりして、気ぜわしきのなかに、ふと気を静めるようなきっかけを与えてくれたりするのである。

「悪戯」は「いたずら」と読むが、「いたずら」にもさまざまあつて、「気のいい奴」の「悪戯」は大目に見てやる文化もある。幼児の「いたずら」を「おいた」と表現するとき、そのまなざしはきつくはないはずである。

### 意のままにならぬ気

「気」には、意のままにならぬ面もある。「気に入る」が、「気が乗る」かは、本人の「気持」しだいだとはいえない。何がしか原因は自分以外のところから来てい

る。

「短気は損気」。「気質」や「気性」は、自分でコントロールできるようでいて、実はそうやすやすとはいかない。「気質まる出し」の人間に出会ったら、どうしてこんななのだろうと、それこそ不気味になる。何か邪氣が本人に乗りうつっているのではないか。憑きものがそうさせているのではないか、と思えることだってたくさんある。

近代社会は、そういうデモニッシュな、超自然的な力を何とか手なづけようとして、別の「キ」を考え出した。「気」ではなく、「期」である。

たとえば「反抗期」。

それは、「気」よりも分類に気をつけている。しかし、暗黙の仮説がある。一つは、「反抗期だから仕方がない」と冷静に構えよ、という指令である。時には、「仕方がない」が「打つ手がない」になり、「あきらめよ」という暗示になったりする。もうひとつは、「ある一定期間が過ぎれば直るだろう」という予想である。こ

の指示は、時には「慰め」にもなり、気安めにもなる。

でも、「第一次反抗期」だの、「第二次反抗期」だの、いくつも案出されると、気が気でなくなるのも人情というものである。

学問的な用語としての「〇〇期」も、「気」の世界をうしろにひきずっている。少なくとも、日常場面から見れば、そういう気配がする。

「気に病む」ことはよくない、と忠告されてもなかなか止むことはない。「気にするな」と言われたことが、かえって「気にかかる」からである。人間は、そう気骨のある人ばかりではないからである。

#### むら気

対極には「むら気」がある。「むらぎ」と濁る。こちらには「気に病む」とくらべると、場当り的で、気移りする。ひとつのことにこだわらないで、つきつきと対象を変えていく。「気が散る」とも違っている。「気が散る」のは、少なくともなにかひとつのことに集中しようとす

る構えが一方にあって、それと葛藤する形で生まれてくるのであるが、「むら氣」は、葛藤など初めから捨てている。

かかわる相手は数が多いし、種類もさまざまだ。多数で、多彩なのである。したがって、これらとていねいにおつき合っていたのでは気が重くなってしまふ。つまり、表面的に、浅くつき合うのだ。

すぐ飽きてしまふ。

愛用の玩具とか、愛読書とか、「愛」と名のつくことではない。相手に対しそうであるなら、自分に対してもそうである。時間をかけて発酵してくるといふようなことに対しては「氣が向かない」。

「むら氣」のうしろには瞬間性がひそんでいる。瞬発力ばかりあって、持続力がないのに似ている。ことばが多く消費されているのに、意味は交流されていないおしゃべりに似ている。

「氣分屋」である。

おとなにも、子どもにもいる。いや、「氣」という観

点から見えていけば、おとなと子どもの境界線は相対的なものになってしまい、子どもっぽいおとながいたり、おとなっぽい子どもがいたり、年寄りじみた青年がいたり、若者じみた老人がいたりするのがよく見えてくるような氣がする。

しかし、「氣がする」だけでは不十分だから、「氣」の微細なムードについて考えておかねばならない。

氣がまえ

「氣」には心身未分化、主客未分化というようなレベルの用法がある。しかし、微妙なのは、自分とかわかりをもっている対象とのあいだで生じる。対象が人であったり、擬人化されたものであったりするが、対象と自分のあいだで、〈こちら〉と〈あちら〉が明確に区別されていないで、対象の方がある作用を及ぼすのである。

「氣配」を感じたり、「殺氣」を感じたり。逆に「氣勢」を挙げたり、「氣合い」を入れてみたり。

いったい掛け声というものはどういふものなのだろう

う。それは、自分で自分に向けている「氣勢」であり、「気合い」である。同時に、明確に正体はわかっているが、あたりに聞かせるためのものでもある。

「ガンバルゾ！」という氣勢。「ヤルゾ！」という掛け声。「ファイト！」という氣勢。「元氣を出せ！」という掛け声。みな、この構造をもっている。あたりをつん裂く裂帛ちぢやくの気合いにしても、静かに氣を落ちつけるための深呼吸にしても、みな「氣」を様式化したものである。

#### 氣の果てに

日常の場面では「氣」は通貨のように磨り減らされている。表面はツルツル、スベスベになっている。だから以上のべたようなことは削りとられてしまっている。人びとは氣兼ねなく、氣遣いもせず、「元氣」だの、「氣の毒」だの、「氣になる」だのを平然と使っている。「氣」が制度化されてしまい、「元氣を出しなさい」が日常的に頻繁に使われるに及び、かえって「元・氣」の方が氣にならなくなってしまう。

そして、「氣」の多くは、何の氣なしに使い捨てられ、交換されたりしていく。

その一方で、ヨーガやエアロビックスが人びとの氣分を変えている。

「氣」は、あるときは表層で気軽にはねまわっている。しかし、あるときは雰囲気として人にまつわりつく。

「氣」は本来的に分類されるのを拒んで、「天地の氣」にまで広がり、子どもを通してその片鱗を見せてくれる。

「みんな仲良く、元氣な子ども」。ホントはそうでないからこそ、そういう標語や呼びかけが必要になるのかもしれない。「元氣」ひとつとってみても、そのあらわれ方は場面ごとに異なっている。「元氣な声で返事をする」という時の「元氣」は、瞬発的なものである。が、「元氣よく歩きましょう」は、持続力の方であろう。「元氣に遊びましょう」の「元氣」は、伸び伸びの場合もあるし、力いっぱいの場合もあるだろうし、自己コントロールを巧みにやって、という場合もあるだろう。

こういう違いをいちいち氣にしていたのでは氣が減入



ってしまつて、気疲れがするばかりである。そこは、それ、雰囲気や気分がものをいう。こんなことをいちいち気にかけなくとも、ちゃんと私たちはおよそそのところを読み解いているのである。

それも「気」のはたらきのゆえかもしれない。「人の気も知らないで」と怒る必要もない。「気をもむ」ことも、「気にする」こともなしに、気分よくその気になつてやっている。

これが日常だ。しかし、日常のほころびの向うに、ちらと姿をあらわす「元・気」の何やら気になる世界がある。効率だの、投機だの、因果関係を単純化することに価値があると思ひ込んだ考え方が隠してきた多次元の世界だ。

日常のほころび。それをもたらすのも子どもである。彼らは、さまざまなやり方で人の気を引こうとする。雰囲気を読みとり、気分に応じて近づいて来たり、距離を置いたりする。気安めを言い、気になることをしでかす。

しかし、彼らが見せてくれるのは時間の形である。時間とともに変わっていくふしぎな存在。彼らとともに〈こちら〉までが変わっていき、向かい合ったり、並んだり、支えてもらつたりして歩いていく。えたいの知れぬ面をもち、〈こちら〉の気を引き、〈こちら〉に挑戦してくるように。

その多様な面を「気」はホログラフのように描き出している。

気骨、気品、気っ風、もそのような過程から生み出される。

(名古屋大学)